

# 命を守る下校時避難訓練の構築 ～東日本大震災の教訓を踏まえた防災教育の試み～

政策・メディア研究科2年 中川優芽

## 1 はじめに

### 1-1. 学校教育における避難訓練

文部科学省(2013)「防災に関する基礎的・基本的事項を系統的に理解し、思考力、判断力を高め、働かせることによって防災について適切な意志決定ができるようにすることをねらいとする。」  
矢守・宮本(2016)は、一人ひとりが当事者として問題にかかわり、主体的な主体となることが減災において重要であると指摘している。

村越・村松(2014)によると、静岡県内の防災担当教員と児童生徒を対象としたアンケート調査で、基礎的な防災訓練は全ての学校で行われているものの、主体性を高める教育についての実施率はまだ高いこと、教員は非日常的な状況のみでなく避難誘導や安否確認など基礎的な対応についても一定の不安を抱いていることが明らかになった。

- 1) 文部科学省『『生きる力』をはぐむ防災教育の展開』2013
- 2) 矢守克也・宮本匠「現場でつくる減災学」新曜社、2016
- 3) 村越真・村松由貴「静岡県の小中学校における防災教育の実態と課題」教科開発学論集、2014

### 1-2. 釜石市について

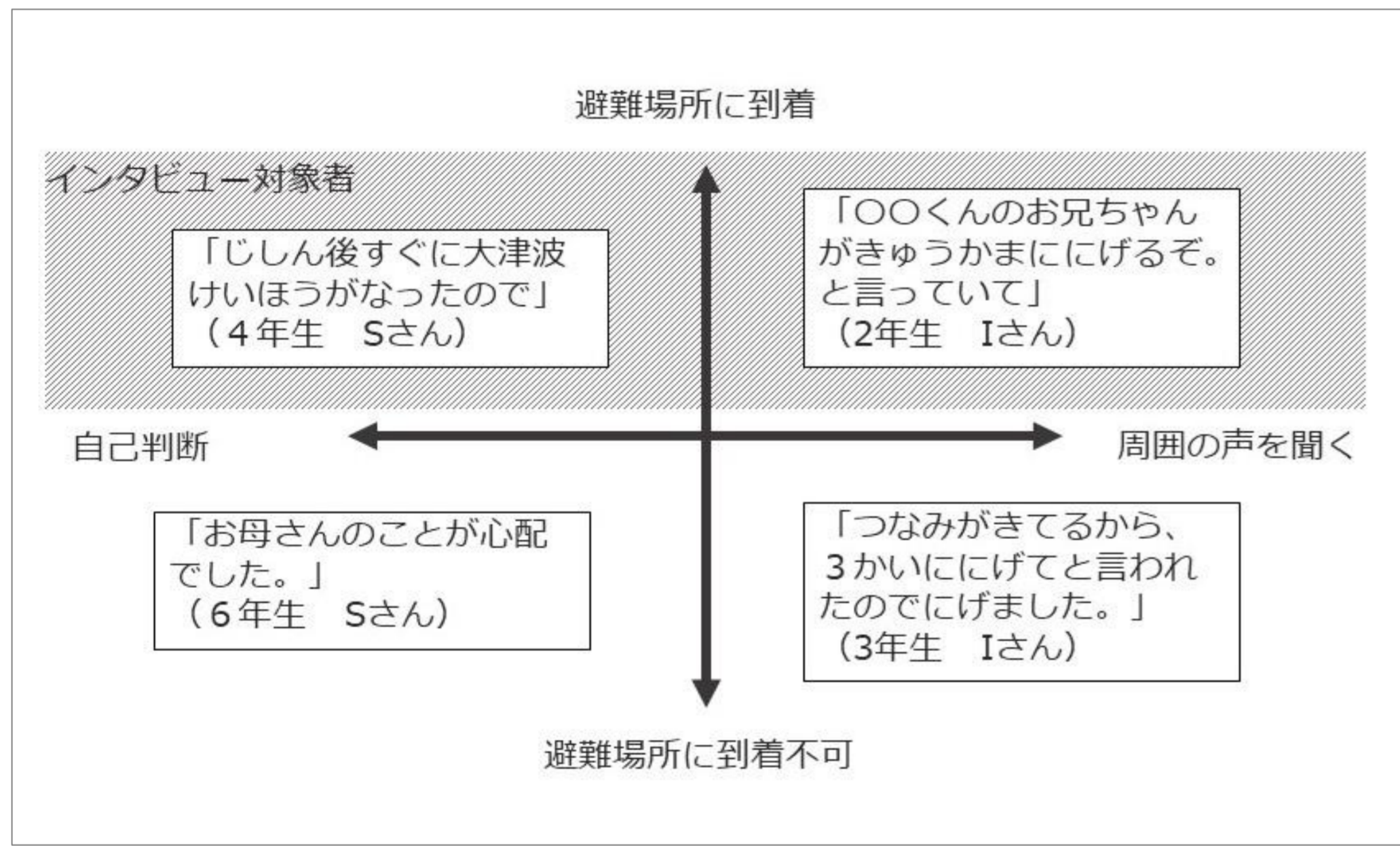
東日本大震災による死者**994名**・行方不明者**152名**(小中学生は5人)  
参考:釜石市

釜石市内の小中学校では、全児童・生徒約3000人が避難し  
生存率 **99.8%**

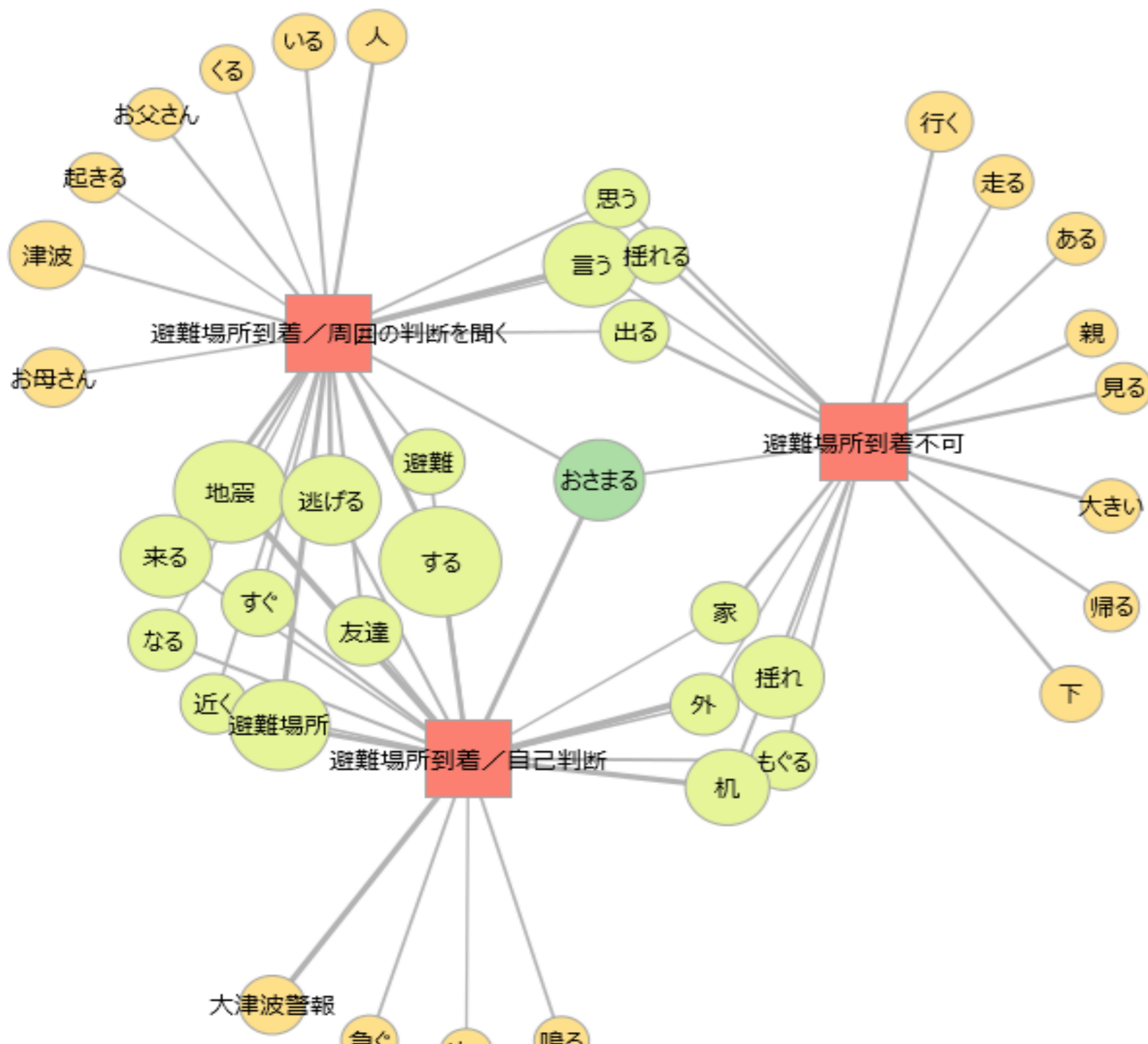
## 2 避難行動の整理

### 2-1. 避難行動の属性

釜石市立釜石小学校児童の避難行動を探るため、まず、2012年3月11日に発行された「東日本大震災釜石小学校記録集『いきいき生きる』」を利用し、地震発生から避難までの行動について記述のある作文52名分を対象とした。



### 2-2. 頻出語の抽出



## 3 釜石小学校 元児童へのインタビュー調査

### 3-1. 概要

目的	避難に必要な要因を抽出する
対象者	避難場所に到着した記述のある元釜石小児童(13名協力)
期間	2019年2月18日～4月29日
分析方法	修正版グラウンデッド・アプローチ(M-GTA)

### 3-2. 質問項目

RQ0	なぜ避難をしようと思いましたか
RQ1	なぜ避難を実施できましたか
RQ2	なぜ安全な場所まで避難できましたか
RQ3	釜石小の防災学習の中で避難行動に結びついたと思う印象的なもの

### 3-3. 結果

M-GTAによる分析の結果、子どもたちの津波避難行動へ影響したとみられる要因として**10個の概念**が生成された。

#### 【学校教育によるもの】

自らの判断で行動する力

居住地域の地形理解

地震から身を守る行動

学区内の避難場所の把握

緊急地震速報・大津波警報 サイレン音の理解

日常的な防災学習の想起

異常事態の感知

周囲の声掛け

率先避難者の存在

家族の相互信頼

## 4 今後の展望

### 4-1. 訓練の設計

#### 下校時避難訓練とは？

釜石小学校では震災前から、下校中にサイレンが鳴ると児童は一目散に場所に応じた避難場所を目指し訓練を繰り返していた。

下校時避難訓練は、上記の概念を複数満たし、従来の訓練と異なり各々が主体的な判断をするにあたって有効であると考えられる。

↓ 南海トラフ巨大地震 被害想定地域への応用

対象: 掛川市立千浜小学校  
理由: 釜石小と似た様子であるため  
・学校が浸水区域外  
・学区が浸水区域  
・小規模校(170~180人)  
・防災学習が充実

実施日: 7/22、11/27  
関係者: 静岡県教育委員会  
掛川市教育委員会  
掛川市役所(危機管理課)  
まちづくり協議会  
千浜地区区長  
PTA(保護者)

→訓練の実現には多くの協力者が必要



2019年7月22日 下校時避難訓練の様子



#### 同様のやり方で考えられる障壁

- ・揺れの規模
- ・津波が到達するまでの時間
- ・時間差を持つ連動地震のケース

地域特性を考慮し、他地域で応用する際の有効性と課題点を模索。